

料金後納

ゆうメール

(株)育脳寺子屋MAC 本部教室 MAC真成塾
〒616-8156 京都市右京区太秦西野町20
電話:(075)871-0374 FAX:(075)882-3777

2016年
9月号

Mathematics Abacus Chinese character

MAC NEWS

お子さんが大人になった時、社会で活躍できるヒントがいっぱい！！

高偏差値、高学歴は時代遅れ！？

フ
ン
ッ



頭の良い人・エリートという言葉から思い浮かぶ人物像、それは「とてつもなく勉強ができる人」「偏差値が高く、学業の成績がトップレベル」「知識が豊富」「旧帝大出身者」etc・・・、

それはイメージどころか「条件」であり、この条件を満たすことが、一流企業や官公庁に所属し、上に上り詰める為のパスポート。

・・・それが日本の定説でした。(注：過去形です)

そしてこのパスポートを手に入れる為、大人は子どもに猛勉強を強い、その結果生まれたのが小学生の頃から進学塾に通い、猛勉強の末に中高一貫校に入学し、さらに一流といわれる大学を目指してさらに猛勉強を重ね、晴れてトップと言われる大学に入る「エリート」の子どもたちです。

幼い頃から遊ぶ時間を奪われ、「良い学校に入れば、幸せな人生が送れる」と親に言われ、勉強に明け暮れていた子どもたちはみんな幸せな人生が送れているのか？・・・どうも、そうは言い切れないのが現状の様です。

「カリスマ家庭教師」「音読の先生」などと呼ばれ、さまざまなメソッドを開発してきた受験のプロ、教育環境設定コンサルタントの松永暢史氏は著書の中で次のように述べています。

「このところ、高偏差値、高学歴のエリートが多くが、社会的に成功とはいえない状態になっているのをご存じでしょうか。彼らは本来たっぷりと遊ぶべきだった子ども時代を勉強で終わらせてしまった結果、好奇心が乏しく、「何かを思いつく」ということが苦手です。無理ありません。彼らの目的は「猛勉強して、いい成績をとって、入学試験に合格して、一流大学の学生になること」でした。

懸命な努力の末にその目的が果たせたとしても、大学に入ってから何が学びたいか、どんな研究をしたいかなど、肝心なことが抜けているのです。

そして社会人になっても、その主体性の無さはなかなか変わりません。自慢は高学歴と高偏差値のみで、新しいビジネスを思いつくどころか、効率よく仕事を進める方法や、周囲の人と協調して仕事をすることもできない・・・こうした使えないエリートが増えているのです。

(リベラル社 松永暢史著 賢い子どもは「家」が違う！より)

松永氏いわく、上記のような詰め込み教育をすれば「創造性がなく、自分で考えることもないけれど、プライドばかり高くてお荷物になる社員になる可能性が高い大人になる」との事です。

これにはMACも同意見なのですが、注意頂きたいのは何も「難関校を目指す事、通う事」がいけないと言っているのではなく、「難関校に入る事を目標とし、そこに入る為の勉強をする」ことが良くないと言っているのです。

受け身ではない能動的な学習を進める中で、難関校に受かる実力が付いて、その結果受かるのであれば、この上ないことだと思います。

MACの先輩中学生でも、MAC式の自学自習を通して実力を付け、いわゆる「御三家」と言われる難関高校に受かった人は何人もいます。

MACでは生徒たちに「勉強はそこそこでもいいし、社会に出てから必要とされる人になりましょう」と言います。(子どもたちはピンとこないでしょうが)

学生の間は用意された解答を答えれば「成績の良い優等生」とされますが、社会に出たら定期試験はありませんし、日々答えの無い難題に立ち向かわなければなりません。その場その場で臨機応変に考え、行動する力が必要とされます。要するに、学生の間求められる事と、社会に出てから求められる事があまりにかけ離れているのです。

志望校合格のための勉強しかしていない子は、社会に出てから求められることに対応できない子が多いと、松永氏は仰っているのです。

だからこそMACでは社会に出た時に困らないように「しつけ」から始まり、自分の出したごみ(消しゴムのカスなど)は自分で掃除して帰る、忘れ物をしない、という指導をしますし、中学部では学習計画を自分で立てて、予定通りに学習を進めます。学習を通して、受け身ではなく能動的に行動する訓練をしているのです。

すぐに成果は現れないかもしれませんが、確実に社会人になった時この習慣は役にたってきます。

育脳トライアルで難関校に合格できた！？

先述の松永氏のコメントの中に、

好奇心が乏しく、「何かを思いつく」ということが苦手です。

という部分がありました。MACでは知識よりも「何かを思いつく」＝「知恵」の部分を伸ばしたいと考えています。そこで、効果を発揮してくれるのが毎月感想文を提出頂いている「育脳トライアル」なのです。

育脳トライアルは答えが一つではない問題が多数あります。(学年が上がれば上がるほど、そのような問題傾向になります)なので子どもたちは好奇心を持って自分なりの答えを考えます。

答えが一つではない問題に取り組み、自分なりの答えを出す。この訓練をくり返す事で、好奇心を持って取り組み、「思いつく」ことのできる子に育つのです。

極論で言えば、答えが合っている、間違っているという「結果」は二の次で、子どもたちがどう考え、どう答えを導き出したかという「プロセス」の方が重要なのです。

育脳トライアルはMACのオリジナル教材ですが、多くの塾や幼稚園、施設などで導入頂いています。先日、付き合いの長いある塾の先生から電話を頂きました。

「小学校からうちに通っていた生徒が先日、神戸大学に受かりました。最後に生徒が『僕が志望校に受かったのは、小さい頃から育脳トライアルに取り組めたからだと思っています。あの教材のお陰で答えは一つではない、他の見かた、考え方があったと知った』と言っていました。」

取り組んでいた生徒自身がそのように感じてくれた事、本当に感激です(T_T)

恐らくほとんどの小学生はただ「楽しい～」くらいしか感じずに取り組んでいると思います。しかしどのような意図の教材だったのかは、この学生のように後になって分かるのです。本当に役立つ力は一朝一夕では身につけません。長い年月をかけて、継続的に取り組むしかないのですね。

「環境」で勉強できる子に！

みなさんご存知の通り、こどもは「勉強しなさい！！」と言ってもまあ勉強しません。「MACでは頑張っているようだけど、家ではなかなか勉強しない」と感想文に書かれている方も目にします。

その理由は、MACではみんなが自学自習している「環境」があるからです。家ではテレビ、ゲーム、マンガなど誘惑が多いですし、ソファやベッドもあるのですぐに寝そべってしまいます。(それでもある時期になると、家でも自学自習するようになりますのですが)

「じゃあ、家では勉強させるのは不可能なの??」と思われるかもしれませんが、先述の教育環境設定コンサルタントである松永氏によると、『家具・おもちゃ・本の選び方や配置を変えるだけ。家で簡単に子どもが賢くなる空間作りができる』と仰っています。特に10歳まではその効果が大きいのだとか！それをいくつかまとめてみたいと思います。

家族が集まる場所を賢くなる空間に

松永氏は長年の家庭教師の経験から、家に上がって最初にチェックされるのはリビングのテレビです。今はテレビの無い家はほぼありませんが、今まで担当したご家庭の中にはテレビの無い家もあったのだとか。松永氏いわく、

「テレビの無い家庭のお子さんは、ほぼ例外なく全員勉強がよくできて、飲み込みが早く、独創性があった」

とのこと。最悪のケースは常にテレビがつけっぱなしのところ。その場合は特に意識もせず、少しでもマシな番組を探すようになります。

テレビは一方的に情報を送り付けてくる道具です。それをず〜っと見続けることで積極性や独創性が育つはずはありません。しかし、中には良質な番組もあります。今の時代にテレビを撤去！というのは難しいので、せめて見る番組の選択と時間の制限は必須ではないでしょうか。

次にリビングに「本」を置くという事です。大きな本棚を買い、ぎっしり本を詰めるということではなく、ちょっとした棚を設置し、そこに家族それぞれが読む本を置くだけで良いのです。

いつでも本が手に取れる環境、そして常に家族の誰かが本を読んでいる環境。これは賢い子どもを育てる為の、最も効果的で早い方法です。

子どもがまだ小さい間は、子どもが手にとって自分で楽しめる本と、親が読み聞かせをする為の2種類を用意しておくのがよいでしょう。

例えば、写真イラスト入りの図鑑（宇宙・動物・植物など）はオススメです。無理なく自分で気になったことを調べる習慣が身に付きますし、その習慣がつけば上位の学校を目指す時には必須となる「自ら調べて疑問を解決する」という力に繋がるからです。

家族共有の場所をきちんと整えておく

家族全員が毎日必ず使う場所、それは浴室、洗面所、トイレです。いずれも使う時間は限られ、ひどく汚れるわけではありませんが水滴や髪の毛など、「使った痕跡」が気になる場所です。こうした家族共有の場所をきちんと整えることは、マナーの基本となります。

例えば洗面所を使った後は髪が落ちていないか、歯磨き粉が飛び散っていないかをチェックし、タオルなどもきちんと直しておくなど、「自分が使う前の状態に戻す」ことをルールとして決めておくのはとても大切なことです。

なぜなら、家庭での振る舞いは必ず公共の場に現れるからです。

公共の場の使い方には、その人の公共心、協調性、思いやりだけでなく「次の人が使う時にどう思うか」という創造力が現れます。

「掃除係の人がいるんだから、客が公衆トイレを綺麗にすることなんて考えなくていい」という考えでは、子どものアタマが伸びるチャンスを奪うようなものです。

次に使う人のことを考えて、皆が使う場所を汚さない。使った後は元通りに整える。このしつけは思いやりのマナーであり、子どもの創造力を豊かにする、とても大切な教育なのです。

先述のように、MACでは自分の出したごみのカスを捨てるなど、「次にこの机を使う人が気持ちよく使えるように」ということを考えるように指導しています。

ただ自分の出したゴミを捨てる、というのではなく「なぜそうするのか？」ということが考えられるようになれば、大きな成長ではないでしょうか。